

CSRと多様性

國部 克彦（こくぶ かつひこ）

神戸大学大学院経営学研究科 教授

CSRのキーワードの1つに「多様性」がある。多様性という概念は、その言葉が使用される文脈で様々な意味になる。職場における多様性であれば、日本では男女の多様性が想定されるが、場合によっては、民族の多様性や年齢の多様性が重要な場合もある。また環境面では、生物多様性がクローズアップされ、今年は愛知でCOP 10が開催された。

多様性という概念はdiversityの訳語であり、もともと日本ではあまり馴染みがなかったが、CSRが普及するにつれてかなり浸透してきた。しかし、その意義についてはまだ十分に理解されていないようである。そもそも多様性が強調される背景には、それに対立概念としての一元性が想定されていなければならない。一元性に対する批判として、多様性を理解しないと、なぜCSRが多様性を重視するのかを十分に理解することは難しい。

CSRのCはcorporateであり企業を意味する。企業は経済組織であり、営利の追求を目的とする。営利とは利益であり、それは金銭単位で表現される。そのため企業活動は金銭単位で意思決定が行われ、企業活動は金銭単位によって管理されている。これは金銭による価値観の一元化であり、経済活動をしていると、利益を得ること、お金をもうけることは良いことだと錯覚しやすいが、古今東西の宗教や哲学はお金をもうけることを強く戒めてきた。

皆さんも小さいときにお金を触ると手を洗いなさいと、親から注意されたことはないだろうか。これは、何もお金が物理的に汚いか

ら手を洗えとっているのではなく、金銭というものが、本質的に忌避されるべき性質をもつことに、われわれが潜在的に気づいていたからである。

しかし、企業現場ではそうはいかない。金銭的な収入が無ければ、企業は立ち行かない。営利追求はもちろん必要である。だが、金銭による一元化は人間の最も深い部分を損なう危険性があることも理解しておかないといけない。それは、極度に金銭至上主義に突き進んだ企業や組織のあっけない崩壊の事例を少しでも思い出せば、すぐに理解されるであろう。

金銭＝経済による一元化を少しでも食い止め、人間性を回復させるには価値観を多元化するしかない。この多元化がCSRでは「多様性」と呼ばれ、様々な場面で経済による一元化の不利益を食い止める役割が期待されている。職場における多様性は、本来的には多様であるべき人間性を回復させるし、生物多様性はすべての生物が生き延びていくための条件である。

職場での多様性は、一昔前は「差別」として認識されてきた事項と類似している。男女差別、民族差別、年齢差別など。しかし、多様性は差別とは逆に、それぞれの役割を伸ばすという意味で、よりポジティブな考え方を含んでいる。多様性は、経済活動の欠点を補い、逆に活力を高めるコンセプトである。今後は、多様性からどのような力を得るのか、ということが重要になり、そのためには新しい社会の構想が必要となろう。